

【あとがき】

出会いとつながり

これまでの全体学習の取り組みを振り返るとき、私にとって全体学習は多くの先生方や生徒たちとの出会いやつながりの中で、自らの生き方を問い合わせ続ける営みであったと言える。

特に全体学習がスタートした1990年度からの2年間、学年通信『ねんりん』を通して、学年集団が一つになり、保護者との強烈なつながりをつくっていただいた学年主任の仁木先生の存在が、私の教育観を大きく揺さぶっていただくことになった。多忙で厳しい2年間であったが、あのときの本心をぶつけ合う教師集団の絆が、全体学習を継続させることになり、その学習内容を進化させていったと言える。今も、当時の様々な場面がよみがえってくるが、私の存在をかけて取り組んだ『私の目をみて！』の授業を阿部先生が、ビデオに収めていただいたこともなつかしく思い出される。

また、板野中学校での3年目、1992年度も強烈な1年であった。それは生徒たちとの厳しい現実の中で、教師集団のつながりの重要性を認識していく営みであった。当時、教師集団のつながりを確かめるように、よく酒を飲み語り合った。とりわけ全体学習の後は、必ず仲間で飲んだ。そのときの議論、熱き語り合いが、様々な課題の中で揺れる生徒たちとつながっていくエネルギーとなっていました。それが全体学習をより熱いものにしていったと言える。特に、生徒の訴えで実現した卒業式前日の全体学習や卒業式の答辞は、今も心を熱くする。

4年目となった1993年度は、2学期、3学期と、私は「道徳教育読み物資料作成協力者会議」の委員として、文部省に通いながらの教育実践であり、多忙な毎日を過ごしている。しかし、生徒たちとの一日一日は私にとってかけがえのない時間であり、常に「今を生きる」という実感があった。そんなつながりの中で生まれた道徳学習の一つが、映画『学校』の授業である。

中学1年、2年、3年と、2回持ち上がることができた1994年度からの6年間も、ドラマの連続であった。最初に1年生を担任したとき、徳島県で開催された全同教大会前日に全校生徒による全体学習を公開しているが、その全体学習で1年生は、公開討論を行った2年生に思いを返し、3年生との討論を深めている。また、毎学年のスタートに実施された参観授業と、そこから深められた教育実践は、私に教育の「よろこび」と可能性を実感させてくれるものであった。

人間の内面をみつめる道徳教育や同和教育、まして全体学習は、生徒一人一人の生き生きとした関係性の中でこそ、確かな取り組みとして成立していく。私にとって、板野中学校における1994年度からの6年間は、全体学習の取り組みを検証することを通して、私自身が生徒と共に、自己や他人者、社会をみつめ、自己の生き方を内省する日々であった。

1999年度、中学3年を担任したとき、先輩たちが築き上げた教育実践や、中学1年からの取り組みの集大成をするかのように、生徒たちは様々な花を咲かせていくことになる。その道徳学習や人権・部落問題学習の一つ一つがドラマであり、共感し合い、自他や社会をみつめ、自己の生き方を内省しながら、その存在を輝かせていく生徒の姿に、道徳教育や同和教育の「よろこび」を思い続けていく一日一日であった。

私は、1990年度から1999年度の10年間、板野中学校同和教育実践記録『峠を越えて』の編集に関わってきた。私にとって、1年1年の実践を『峠を越えて』にまとめることが、翌年へのステップとなり、自らの教育実践をみつめ直す機会になってきたと言える。

私は、今一度、板野中学校における全体学習を土台として取り組んできた10年間の教育実践と、私の教職20年を検証していくために、実践記録『峠を越えて』－全体学習が拓く教育のよろこび－を刊行することにした。それは、これまでの授業実践を検証することから、新たな道徳学習や人権・部落問題学習を創造していく手立てになればと願ってのことである。

本冊子の巻頭の言葉も、漆原先生に書いていただいた。私は、実践記録『よろこび』をまとめているが、その巻頭の言葉も、漆原先生に書いていただいているし、先生には、これまでの『峠を越えて』を始めとする、私がまとめてきたすべての原稿を常に読んでいただき、常にご指導を受けてきた。また、私は先生との出会いから、教育への視野を広げていく数多くの機会をいただいている。先生との出会いがあったからこそ、これまでの実践があったこと、先生には心から感謝している。

先生との出会いは、新任教員として勤務した藍住中学校であったが、先生が異動されるとき、またいっしょに仕事をしようという話をしていただいたことを憶えている。先生が板野中学校に赴任されたから、私は板野中学校を希望したのであった。

人生の出会いとは不思議なものである。一つのきっかけがそれぞれの人生を大きく変えていく。板野中学校の先生方や生徒たちとの出会い、そして全体学習の営み、その一つ一つが私の人生において、偶然から始まった必然であった。

全体学習が始まった当初、中学3年になって、初めて自らの立場を自覚した生徒たちの中には、大きく揺れる生徒も存在した。その現実に直面するたびに、私は同和教育の重要性を思いつきり認識していく。そんな生徒たちの目覚めや立ち上がりに寄せて、私に語ってくれた母親の言葉が今も、心の中に刻まれている。

「先生、私が初めて、自分が同和地区出身であることを知ったのは、結婚の時でした。信頼していた相手から『君の家は同和地区らしい。家族が反対しているので結婚はできない』という言葉で、私は初めて自分が同和地区出身と知ったんです。あのときほど親を恨んだことはなかった。この子もそんな思いになるのかと思うと本当につらかった…。」

まだまだ厳しい差別の現実がある。これからもより一層のこの実践記録を糧として、一人一人の生徒と豊かにつながっていきたい。「出会いとつながり」これが私の同和教育のよろこびである。

本冊子に掲載された授業記録は、それぞれの場面に私の思いを綴っている。また、授業づくりの本質に迫っていくために、それぞれの授業に込めた願いや思いを私なりにまとめている。いずれの授業も生徒一人一人が主体的に語り合った授業であるが、その教育実践や授業内容について、ご意見ご批評をいただければ幸いである。

2002年3月31日

森 口 健 司



1996年度板野中学校 3年全体学習 於・板野中学校体育館

峠を越えて —全体学習が拓く教育のよろこび—

2002年3月25日 印刷

2002年3月31日 発行

著 者 森 口 健 司
発 行 板野中学校「峠の会」
〒779-0105 徳島県板野郡板野町大寺字郡頭11
Tel (088)672-0079 FAX (088)672-0164
印刷所 グランド印刷株式会社
徳島市万代町6丁目20-15
Tel(088)622-8448 (代)